

② 上岡みよさんの姪

【歡喜の余滴】 57頁 私の言つたは嘘だ 大正十三年 四月 十六日

真田増丸先生の御講演を大竹町の光明寺で聞いて 午前十一時頃上岡さんの宅に行き、二十五六歳の姪の方に 午後六時迄話したが 判らない。夕食の頃に成つたから帰宅する為、仏様に向い偈文を誦して御文章を終り、向き直つて、

仮令罪業は深重なりとも必ず救うと仰せらるる本願ですから、すねている心、曲つている魂、石の様な重苦しい心、五逆謗法の性根も悉く承知の上で、泣く泣く墮ちる貴女を罪有りながら救うの勅命でありますよ。

「私程罪の深い者はありません。あれだけ浴びせ掛けられる程聞かされても蛙の面に水で、有難いとも嬉しいとも尊いとも思いません。私の心は石です、とても仏様の心は受込みません、頭で判断する事も出来ません、私は一体どうしたらよいのですよか、これだけ困っているのが仏様にお判りがないのでしょうか、仏様を怨まずにはいられますものに、仏様なしでは一日も生きられません。」

「そうです、貴女の心は石です 鉄です、貴女が頭で判断出来る様な小さなお慈悲なら 不思議とは申しません、貴女は思ふも言うも行ふも皆嘘なのですから 有難うなれないのが本当です。」

「なれないとすればどうしますか、墮ちるではありませんか。」

「未だ貴女は何とか成れようかと思ふ自力が捨たりませんア、成れる柄でないから 私達の心には必墮無間と銘が打つてあるではないか。泣いても 叫んでも 聞いても 信じても 自分の持物なら 皆地獄一定です。」

「何にも受け付けません、油石が水をはじく様にぴりともしません。」

「ぴりともせん心、上の感情は騒いでも底の方に墮ちるも上がるも何ともない心が、久遠劫から六道を輪廻させているのです。」

その動かん心、変らん魂に打込んだのが如来の念力であります。法を受込み得ない貴女のその心が可愛くてく十劫已来大音張上げて自分で始末に付かん儘を 其の儘来い墮ちる儘が唯じやと呼んで下さる親様ですよ。貴女は今仏様なくては生きられないと言われましたが、仏様は貴女なしには一日も生きられないのです、泣き崩れているなりが、弥陀の正客です、お目当です。」

「このほんやりしている、判り切らない、すねた儘で六字の主でございませうか、何一つ役に立たない私の儘が唯でございませうか、嗚呼重荷を取られました、泣く涙までとられて私はどう言ってお礼申してよいか判りませう。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、ああ不思議な親じやな。」

仏智の不思議は義なきを義とする。人間の物尺で計られる様な小さいものは不思議ではありません。人間の自力の尽きた

時でなければ他力は働いてくれませう。横着な御親に不足を並べた五逆の罪の子が如来の一人子と言えば広大な親心に感泣せずにはいられないではないか。

上岡のおばさんも御飯の用意していられたが 飛んで来て大喜び、共に夕食を戴いて帰った。次の日立寄って挨拶しない先に、

「甚だ申訳ない事でしたが、私が昨日話した事は皆嘘でしたよ。」

「有難うございました。嘘でも本当でも構いません、墮ちるを墮ちると知らして戴いた程仕合せはありません。」（地獄は一定）

「本当に墮ちたらどうしますか」

「仏様が嘘は申されませう」（極楽一定）

「何とか成りましたか」



「私は自分を誤魔化していました」と言つて泣き出した。

貴方はよい処へ気が付きましたなア、多くの方が自分の心に誤魔化されて 流転を續けて来た本心を知らないのです。只感情に支配されて、動かない纏りの付かない心を知らないで上塗りをしたり、お化粧をして信じた振りをしていられるのです。自分の心が本当に知らされなくて救う本願が本当に判るものですか、親に遇うた自覚も無ければ不実を赦された体験もなく、書物に唯と書いて有るから、其の儘と仰るからと 空吹く風に流していらる方が多いが、書物に書いて有るのは書いた人の信仰だから、それを知つたのは真似であつて真実ではない、書物に書いて有つても未来迄持つては行かれまい。六字に煩惱が融合した一体の境地が有つたかどうか 浄土真宗は其の儘と思えと上から押える宗教でなくて、此の悪性が救われたとは不思議ではないかと下から湧き上がる宗教である。

自信の抜けた教人信ばかりの説教だから、自己共に明かな事がないと仰るのも無理はない。而し疑謗する人が有れば信順する人も有る、不了仏智の人が有れば明信仏智の人もある、唯と思つてゐる人が有れば唯に成つた人も有る、薄氷を踏む様な信罪福の心を以て往生に向う人が有れば、踊躍歡喜して廣大勝解の者と成つた者も有る。自分に明らかな事が無いから他人にも無いと言ふのは独断である、盲人が眼開きを嗤うのと同様である、自分に誤魔化されていて知つた振りして同行顔で他人を誤魔化す、報恩の称念が出て来る、疑わずに喜ばれると本心を立派に包んで親様や三世の諸仏を誤魔化しているのである。

求めて求めて求めた最後、疑うて疑うて疑ひ抜いた後、計らうて計らうて計らいつまつた終局、自力で自力で自力で突張り抜いた後、動ける迄動き、ばたつける迄ばたつくのが 久遠劫からの自力の執心を振り捨て、難中の難を切抜けつつあるので、はないか、死んでから地獄で受ける苦惱よりも、立つても坐つてもいられぬ現在の焦熱の苦しみを抜いて欲しいと言ふのが、親鸞聖人様の吉水禅坊に跪かれた時の心ではないか。後生は一人凌ぎである 親の信心が子の信心に成らないのだから、

況して七百年後の私の苦悩の身替りにはならない。而し心の御親に遇うた時こそ聖人の信心と私の信心が一体である。心の御親に遇われたか、信の一念で仏智満入し、今こそ明らかに知られたりと広い世界へ出られたか、如来に信じられた事が信じられたか、本当に唯と言う言葉までいらぬ唯に成ったか、そこで初めて、あら心得易の安心や、行き易の浄土やのお言葉が生きて来るのである。

62 谷本君へ

三十日

その後お心の中は如何です、道理や理屈で考えが付きましたか。

静かに自分を凝視すればする程、纏まりの付かない、嘘偽りで堅めた人間であると言う事が自覚されません。こんな心を見抜かれた上の弘願の大法であるのに、私達の小さい了簡から、ああ成れない、こう成れない、何とか成りそうなものと、文句を並べ不平も言つて、実地もがいて見ましたが、机の上の議論で知つたのと、眞実歩いて見るのとは苦勞が違います。八方塞がりに成つて見なければ、今迄聞いたり知つたりした事が全部無効で有つた事が判りません。断崖に来た時、初めて迷つた事をしるのです。

私の意識で全く意識し切れなくなつた時（捨自）初めて絶対の親心に生かされるのであります（帰他）何と力強いではありませんか、廣大ではありませんか、私が全然間に合わぬ儘が全部仏様の間に合うとは不思議ではありませんか、極悪最下の私に極善最上の法がましますとは、南無阿弥陀仏と称えずにはいられません。